

2015年度立命館大学校友会 東日本大震災復興支援事業 東北応援ツアー レポート  
テーマ「現地を訪問して想うこと」

ツアー参加者氏名：真砂 利宏

卒業年：1985年 卒業学部：経済学部

{参加コース} A福島県コース

昨年に引き続き校友会主催 東北応援ツアー 福島県コースに参加させて頂きました。昨年は川内村を中心に相馬地区を視察致しましたが、今回は原発被害の一番大きいいわき地区。町全体が未だ住居制限や帰宅困難区域となっている浪江町では、既に4年半が経過した今でも、震災当初から時間が止まったままの景観でありました。楢葉町にあるJヴィレッジでは上田副社長よりスライド資料を元に、震災を境としたその後の変貌ぶりや機能を転化せざるを得なかった苦労話をご講演頂きました。震災以前はナショナルトレーニングセンターとして130名の職員が働いていたこの施設も、現在は原発処理作業員の受け入れ施設として13名の方々のみが働いているということです。またスバリゾートハワイアンズでは震災当時の統括支配人であった下山田様にご講演頂き、お客様の安全を第一とする組織トップの判断力と行動力を学ばせて頂きました。

行程2日目のあかい農園ではハイテクとローテクを駆使したトマト栽培を見学出来ましたが、まだまだ風評被害が根強いことも実感しましたし、アクアマリンふくしまでは津波被害の爪あとや、一般ではなかなか見学出来ない施設や設備の舞台裏を見ることが出来ました。一連の視察と講演を通じて、福島県民の方々が元の暮らしにはなかなか戻れない(帰れない)事情や今後の課題を改めて認識出来たことは大変有意義でありましたが、私自身が一番実感したのは、有事に対するトップの判断力と行動力です。そして顧客基点の考え方は、これからの自身の活動にも大いに繋がる内容でありました。

昨年同様本当に良い機会を与えていただきましたこと、深く感謝しております。また今回のツアーにお骨折りを頂いた本校校友会事務局始め福島県校友会の方々には重ねて御礼を申し上げたいと思います。

最後に昼食場所で立ち寄りました「いわき・ら・ら・ミュウ」で展示されていた、「いわきの東日本大震災展」パネルの一節をご紹介します。「人として生まれ、男として育ち、自ら警察官の困難な道を選んだ、その諸君だからこそ預けられた任務である。現場は困窮している。助けを求めている。必ず任務を果たせ、お役に立て。現場では自活を第一とし、被災者以上の処遇を求めてはならない。そして、全員無事に帰任せよ。任務を果たし、全員の無事の帰還を待っている。」(大分県警察本部長 出発式の言葉)

以上